謎のカードはここに

saitousou

齊藤　想　『謎のカードはここに』

「君たちはＣ・モフェットの『謎のカード』という短編小説を知っているかね」
　と、ひとりが問う。すでに定年退職をして悠々自適の身である彼は、この月１回のミステリの集いに顔を出し、自らの知識や推理を披露するのを生きがいにしていた。
　ここにいるメンバーは彼に劣らずのミステリ好きの集まりだ。知っているか、と聞かれれば、知っていると答えるに決まっている。なにしろ、『謎のカード』という短編小説は、物語中に示された謎に明快な解答を与えないまま終わるというリドル・ストーリーの古典なのだ。そのような質問をされること自体が、ここのメンバーにとっては不服だった。
　言い出しっぺは、視線の意味を感じたのか、少し控えめに言葉を継いだ。
「えーっと、もちろんご存じだとは思いますが、簡単にストーリーを説明いたしますと、主人公は旅先のパリで見知らぬ美女から謎のカードを渡されます。フランス語を理解できない主人公は、カードに書かれている文字が読めない。そのため、カードを周りのひとに見せて内容を知ろうとするが、そのカードを見た人は例外なく「なんていうことだ」と頭を抱えて主人公と縁を切ってしまう。警察に逮捕されて旅先のフランスから国外退去処分を受け、妻からは離婚され、長年共に事業を築き上げてきた無二の親友からも、カードを見せた途端に共に仕事を続けることはできないと手のひらを返される。しかも、だれもそのカードの意味を教えてくれない」
　ラム酒をちびちび舐めていた老人が、言い出しっぺの言葉を止めた。
「つまり、ここでその話を持ち出したということは、カードの謎を解いた、という自信があるわけじゃな」
「そうそう」
　と言い出しっぺは軽く答えた。
「といっても、おれの解答を簡単に披露してはつまらない。ぜひとも皆さんに『謎のカード』の秘密を推理してもらおう。まあ、こういう趣向ってわけだ」
　言い出しっぺの態度にメンバーは不服そうだ。だが、元がミステリ好きなので、すぐに話に花が咲く。
「確か作者のモフェットは解答編を書いていて、それが“悪魔の魂の絵“とかよく分からない代物だったというなあ」
「そうそう。だれもが納得する解答ではなかったので、未だに謎が続いているわけだ」
　ベテランたちが、お互いの知識を確認しあう。しかし、考え込むばかりで容易に解答案が出てこない。言い出しっぺがこの難問を解いたのは自分だけだという優越感に浸りだしたころ、「私なら」と若手が案を提示した。
「どうぞ」と自信満々に言い出しっぺが若手を促す。
「だれもが恐怖するような気味の悪い絵だった、というのはどうだ。つまり、その絵を見たらだれもが主人公のことを嫌いになってしまうほどの、酷い絵というわけだ」
「それはダメだな」と言い出しっぺが即座に否定した。

「カードには主人公の読めないフランス語が書いてあった、とある。その事への説明がなされていない。いくら吐き気を催すような絵だからといって、妻が離婚を迫ったり、共に事業をしていた長年の親友から絶縁を迫られたりすることがあるものか。しかも、絵であれば、主人公も内容を理解できるはずだ。つまり、書かれている文字が重要なのだ。まったくもって、不十分だ」
　それでは、と今度は中堅が手を挙げた。言い出しっぺは解けるわけがないとばかりに、鷹揚にソファーに座り直して、合図の代わりにウィスキーの氷を鳴らした。
「聞かせてもらおう」
「実は主人公は一杯食わされたのです」
「と、いいますと？」
「そのカードには“この男と理由を言わずに縁を切るように。そうして、みんなでからかおう”というような主旨が書かれていたのだろう。話のオチとしては、実はエイプリールフールでした、とハッピーエンドで終わるのだ」
「実につまらない話だな。ミステリとして失格だ」
　言い出しっぺは残りのウィスキーを一気に飲み干した。熟成されたホワイトオークの香りが辺りに漂った。
「主人公は旅先のフランスから国外退去処分を受けている。貴方の説が正解だとすると、警察もエイプリールフールの冗談に協力したことになる。これこそまさに、冗談ではない。もう少し真剣に考えて欲しいものだ」
　言い出しっぺの容赦のない反論に、白けた空気が流れた。言い出しっぺは、そろそろ潮時と見たのか、新しいウィスキーを注文しながらソファーから立ち上がった。メンバーたちの注目を浴びるこの瞬間が、彼にとって至福の時だった。
「それでは解答をお教えしよう。実は謎のカードには不思議な能力が込められていて、書かれている文字は、見る人の痛い部分、つまり誰からも見られたくない心の底をえぐり出すような、辛辣で、嫌みな言葉が現れるのだ。妻が眼にするときは妻の不倫の事実が暴かれ、フランス警察が手に取れば国家機密が、事業を共にしていた親友の前では事業に関する不正が、カードに浮かびあがるのだ。これを見た友人たちはもちろん彼との縁を切るしかないし、内容を聞かれても教えられるわけがない。どうだ、これ以上の解答はあるまい。もしおれの解答に穴があると言うのなら、ぜひともおれと勝負してくれ」
　言い出しっぺは自信に満ちあふれた表情で、メンバーを見下した。だれもが沈黙を保つ中で、先程からラム酒をちびちびやっていた老人が重々しく口を開いた。
「まあ、穴というほどでもござらぬが、モフェットの原作では、カードを渡した美女の死とともに、カードは白紙になって終わる。そこについての説明はどうなっているのか」
「それは簡単なことだ。カードが持つ不思議な力の源泉はその美女で、美女の死とともにカードの力が消滅したのだ」
　老人はひとりで大きく頷いた。言い出しっぺは勝利を確信してメンバーを見渡した。反論するひとは誰もいない。この瞬間が、言い出しっぺにとって、快感の極致なのだ。恍惚とした気分のまま、高らかに勝利宣言を謳いあげようかと思った。が、老人の言葉には続きがあった。
「ところで、美女が持っていた不思議な力を、わしも持っていると聞いたら驚くかね」

　メンバーの注目が老人に集まった。老人はその視線を迷惑そうにラム酒の入ったグラスを静かに樫のテーブルに置いた。
「入手経路は言えないが、わしが持つ不思議な力をある人物に見込まれて、その謎のカードを託されたのじゃ。長生きをしていると幾多もの不思議な出来事、奇跡的なめぐり合いを経験するものだが、このカードもそのひとつでのう。
　このカードはご存じのとおり、見る者を不幸にする。だから今まで誰にも見せなかったし、存在すら隠してきた。だが、もし、お前さんがどうしても自分の解答が正解であるのか確かめたいと思うのなら、このカードをその手に取ってみるかね。もちろん、お前さんに勇気があればの話しだが」
　老人は、謎のカードを懐から出した。
「けっ、くだらねえ」
　言い出しっぺは言葉の勢いのまま、老人からカードをひったくった。言い出しっぺが手に取ると、カードにフランス語が浮かび上がってきた。不幸なことに、彼はフランス語を理解できた。そこには、今まで彼がメンバーに語ってきた知識は雑誌の受け売りであること、披露してきた推理は他人の借り物であることなど、彼が秘密にしたい、いや、自らの立場を守るために秘密にしなければならない事実が容赦なく書かれていた。もちろん、彼が披露した『謎のカード』の解答についても、ある同人誌のパクリであることが記されている。
「早く何て書いてあるのか教えろ」
「あれだけ大口を叩いて、まさか間違えましたは無いだろうな」
「そんな事をしたら退会処分だ」
「ご託はいいから、早く書かれている内容を教えろ」
　メンバーが口々に言い出しっぺに迫る。老人は自分の仕事は終わったとばかりに、再びラム酒を舐め始めた。
　言い出しっぺは重大な選択に迫られた。カードに書かれている内容を読み上げて、自らの立場を失うのと引き換えにメンバーに自分の解答が正しいことを証明するのか。それとも自らの秘密を守るために、完璧なる解答を放棄して、自分の人生のおける大きな位置を占めているミステリの集いから身を引くのか。
　メンバーたちの顔が、彼に時間が無いことを告げていた。